
アザレアの罪

湯川翔子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アザレアの罪

【Nコード】

N4218J

【作者名】

湯川翔子

【あらすじ】

決して許されることのない想い。叔父さん…でもダメなの、だつてこの想いはもう私にも止められない。

(前書き)

近親相愛の要素があります。
苦手な方は閲覧されないようお願いします。

世の中には犯してはならない禁忌は多くある。禁忌を犯すか犯さないかの境目は実に曖昧であり、ふとした瞬間に禁忌に触れることもある。

しかし、それが自分の目の前にあるということは、はっきりと認識している。

それにただ嘆くしかなかった。

。@。@。@。@。

夕方、叔父は、つかの間の休日在家でゆっくりしていたが急きよ呼び出され、仕事先へ赴くこととなった。

電話を切り、急いで出て行こうとする叔父に私は声をかける。

「悠里がまだ部屋に」

「すまん、少し急ぐ。帰りは遅くなるから、悠里を頼んだぞ」

叔父は私の言葉を遮り足早に出て行った。

「：わかりました、叔父さん」

私はちゃんと笑えていただろうか。もうこの人の前で笑顔を作るのも辛くなってきた。

行ってくる、と言い出ていく叔父の後ろ姿をじっと見つめていた。夕日に照らされた叔父が酷く遠く見える。

「ななちゃん」

ふんわりと自分を呼ぶ声がある。

ふと傍らを見ると悠里がいた。大きな瞳を向けてくるかわいいかわいい私の従妹。

愛おしい悠里。しかし、その悠里が叔父と妻美里さんとの愛の結晶であることだけは胸の内でもくすぶり続けていた。今はもう、彼女はいないけれども。

「お父さん、行っちゃった？」

「ちよつと急いでたみたいだから。いってらっしゃい言えなかったね」

そう言う悠里はにっこり笑って首を振った。

「ううん、ななちゃんがお父さんに言えたからいいの」

そう言う悠里に心を打たれ、私は悠里を強く抱きしめた。

小学生でも、悠里は私の気持ちをうすうすと感じ取っている。聡い悠里に気付かせないようにしていたつもりだが、いつの間にか気づいていたみたいだ。

はつきりと口にはしていないが、悠里は応援してくれているのがわかる。

ななちゃんがお母さんになってくれたら嬉しいと、こっそり言ってくれた。でも、でもね悠里、叔父と姪は結婚できないんだよ。

超えることのできない壁は私に前を進むことも許さない。

だから待とう。その壁が自然に消えてなくなってしまうのを。時間がたつごとにどんどん強くなっていく想いには気づかないように家族という絆だけは消えることのない事実だ。それに満足したい。叔父のことを考えると暗い方にばかり考えてしまう。それを振り払うかのように笑みを作り悠里の頭を撫でた。

今は悠里のことだけを考えよう。

「叔父さんもないし、今日一緒に寝ようか」

とたん悠里の顔が輝いた。

「本当？寝る！」

「お風呂も一緒にね。準備しよう」

うん、と返事をしてぱたぱたと走っていく悠里を見送った。

遅くなると言って出て行った日は、帰ってこないことがほとんどだ。きつと今日も帰ってこないだろうから、布団を貸してもらおう。叔父が仕事の時は、時々そうさせてもらっている。

それくらい、いいよね。

こんなことしてるから諦められないのだということをわかってはいるけれども。

・@・@・@・@・@・@・

深夜、深い眠りの中にある意識が唐突に浮上してきた。しかし、覚醒には至らなかったようでまどろみの中をたゆたっていた。

額に温もりを感じた。さらさらと髪を撫でる心地よい感覚がある。それがあまりにも心地よすぎて目をあけることができなかった。

ねえ、なんで叔父と姪なんだろうね。なんで歳が近いんだろうね。お母さん、どうして私を叔父さんの所に預けたの？昔から知っていればきつとなんとも思わなかった。でも、私、こんなに叔父さんのこと好きになっちゃったよ。ねえ、啓輔さん。

「……さん」

ふっと温もりが消えてしまった。

寂しいと思ったが襲いくる眠気に耐え切れず私の意識は、再び底深く沈んでいく。

・@・@・@・@・@・@・

悠里の寝る時間に合わせて寝たせいか、いつもよりも早い時間に目が覚めてしまった。

まあ、それはいい。普段よりも多い時間を利用して、凝ったお弁当を作ろう。可愛いお弁当を作ればきつと悠里も喜んでくれる。タコさんウィンナーにきゅうりのハム巻き、出し巻き卵に炊き込みご飯も作ろうか、野菜も入れなきゃ、もちろん人参は星型で。

あれこれと弁当の中身を考えながらリビングのドアを開くとソフ

アの上には叔父がいた。

「っ……」

予想外のことに、驚いて声を出しそうになった口を慌てて手で塞ぐ。出さなくてよかった。叔父は毛布でくるまって静かに寝ている。帰ってきたのか、それは悪いことをした。布団を占領して寝ていた私にさぞや叔父は驚いたことだろう。

寒いだろうに。そう思って寝室の布団を持ってきて、叔父にかけてやる。

そして、傍らに膝をついて叔父を見つめる。

起きたらすぐに仕事に行くのだろう。わずかな時間を静かに過ごさせてあげたかった。

よほど疲れているのだろう、ピクリとも動かない叔父に近づくと煙草の匂いがかすかに香ってくる。叔父特有のほろ苦い香りに少し安心した。

見ているだけでいい。諦められる。何度も何度も自分に言い聞かせた。でも、そんなことはなかった。見ていると狂おしいほど切ない気持が湧き上がってくる。

少しでもいい、彼に触れたい。

「叔父さん……啓輔さん」

そっと頬に手を添えゆっくりと唇をあてた。暖かった。泣きそうになった。

急に叔父が身じろぎしたので慌てて距離を取ろうとした。

「あっ」

いきなり布団の隙間から手が伸びてきた。手を掴まれ、かがんでいた身体はバランスを崩し、叔父の方に倒れこんだ。そして、身体を布団ごと抱き込まれる。

（起きていた！）

心臓が早鐘を打つ。混乱と恐怖で身を縮めた。

今の行動を知られてしまった。自分の想いも知られてしまったよ

うな気がして叔父の顔を見ることができなかった。

「あー」

頭の上から叔父の低い声が響き、ぎゅっと目をつむる。

顎を掴まれ、上を向かされる。しかし、怖くて見ることができなかった。

「目、開けろ」

そう言われたが首を振って拒否をする。

ため息の音が聞こえた。幻滅された、嫌悪された、そう思い涙がこぼれそうになった。

しかし、次の瞬間、唇に温もりが当たっていた。驚いて私は目を見開く。

焦点がぼやけるほど近い位置に叔父の顔があった。目が、合った。叔父はしっかりと私を見つめている。

驚いて離れようとするが叔父の手が後頭部をしっかりとつかんでいるので頭を動かすことはできなかった。

「ん…」

叔父の唇は柔らかかった。酷く長いこと唇を合わせていたように感じる。

やっと解放された時は、脳みそがとろけてしまったかのように何も考えられなかった。

何だかわからない気持ちさがこみ上げてきて涙がこぼれた。

「泣くな」

困った声で叔父が言う。

武骨な指で涙をすくう。しかし、涙はとめどなく溢れてくる。叔父はずっと手を添えてくれている。

お願いだから優しくしないで。期待してしまうから。

「放してください」

「いやだ」

「お願いです…叔父さんが、汚れてしまう」

正真正銘血のつながっている叔父を愛してしまった穢れた私に触

れてほしくなった。力を込めて叔父の胸を押し返すが、岩を押しているかのようにびくともしない。

どうしようか焦り、わけも分からずあたりを見回す。すると時計が目に入る。もうそろそろ悠里が起きてくる時間になる。

「もうこんな時間、朝の支度を…」

私は立とうとしたが腕を掴まれ動くことができない。

「お願いです：放してください」

「逃げるな」

腰を掴まれ引き寄せられる。

「俺を見ろ。俺から目を逸らすな」

叔父を見ると真剣な瞳と視線がぶつかる。

ああ、叔父のこの真剣な表情が好きなんだ、と不謹慎にも思ってしまう。

その顔が近づいてきて、耳元に低い声で呟かれる。

「お前の気持ちはわかっていたさ」

最初、叔父が何を言っているのかわからず眉をひそめたが、思い当たり血の気が引いてくる。

「ど：して」

唇が震える。叔父の言葉が信じられなくて叔父を見るとは苦笑していた。苦い、苦い笑み。

「あんだだけ熱い視線で見つめられてたらそう思っちまうだろう」
わしゃわしゃと頭を撫でられた。撫でられるというよりもくしゃくしゃにされている感じだが。

「それにお前は顔に出るからな」

困った顔で指摘されて頬が熱くなった。

「そして俺の気持ちは誰よりもよくわかっている」

辺りが静寂に包まれた。私も叔父も動かない、しゃべらない。その沈黙を破ったのが叔父の衝撃的な一言だった。

「お前をどうしようもないくらい愛してるってことを」
目を見開いた。

「う…うそ」

何よりもまず出てきたのは否定だった。私の否定に叔父は困ったように眉を下げた。

「嘘じゃない」

「うそ…うそだ。叔父さんが私なんか好きになってくれるはずない…それに私たち」

「そうだな、でもお前は自分を知らなさすぎる」

俺がどんなに我慢したか知らないだろ、という言葉が鼓膜を震わせた。凄絶な色気を含んだ声に身体が痺れる。

「俺はお前を愛してるよ。少なくとも世間と対峙してもいいと思えるくらいに」

信じられない言葉を吐いた叔父を見つめた。世間に知られることは死と同じくらいに、時には死よりも重く、苦しみを味わうこととなろうに。そして叔父は必ず職を失う。

それほどの覚悟を持って愛してくれると言った叔父に私はまた涙をこぼした。顔を手で覆う。

私の頭を叔父は胸に抱き寄せてくれる。

「お前の優しいところが好きだ、俺にも悠里にも他の人間にも。気が利くところも、でも少し抜けてるところも、何事にも一生懸命なところもみんな好きだ。これが許されないことなんぞ百も承知。お前を預かってから何百という夜を 苦悩とともに過ごした。お前のためにも言っではいけないことだってわかっているさ…でも俺はお前を愛してしまった」

苦しい表情を浮かべながら想いを吐露する叔父の声はかすれていた。そんな叔父が狂おしく愛おしい。

苦しいのは私も同じ。叔父がいないと生きてはいけなくらいに叔父を愛した。自然に消える想い？そんな生易しいものではない。

それは心の奥底に、掘り出すことは不可能なほど深く根付いている。

「私は叔父さんがいなければ幸せになれない。悠里も…美里さんも全部ひっくるめた叔父さんが好き」

「なな」

だから私をひとりにはしないで。私もあなたをひとりにはしない。これからは苦痛だけの人生かもしれない。知られれば後ろ指を指され、否定され、迫害される。

でも私はその道を選ぶ。この人とならきつと歩いてゆける。悠里も守っていつてくれる。私も彼女を守る。

「啓輔さん」

私は彼を力いっぱい抱きしめた。彼は強く抱き返してくれる。

ソファが二人の重みでぎしりと沈んだ。

共に生きていこう。ずっと一緒に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4218j/>

アザレアの罪

2010年12月18日14時50分発行